

「リファレンスチェック」

—初稿—

2025/7/23

さいの

〈人物表〉

北沢 寿明
きたざわ としあき

(34)

証券会社に勤めるサラリーマン

代田 由美子
だいた ゆみこ

(37)

寿明の婚約者

梅ヶ丘 理人
うめがおか まさと

(34)

寿明の同僚

北沢 毅
きたざわ たけし

(59)

寿明の父

北沢 望
きたざわ のぞみ

(59)

寿明の母

1.

高級レストラン・個室（夜）

都心の夜景が一望できる個室。

寿明 「ゆっくりでいいよ」

真剣な面持ちの北沢寿明（34）、指輪ケースをパカッと開いている。向かいの代田由美子（37）、涙のあまり嗚咽していて、顔がぐちゃぐちゃ。由美子、息を整えてから、意を決して、

由美子 「……寿明くんに、言ったくないことある」

寿明 「？」

2.

バー・店内・カウンター席（夜）

寿明の同僚・梅ヶ丘理人（34）、目を見開いて、

理人 「三十、七？」

寿明 「うん」

理人 「……これ軽いホラーだわ」

寿明 「おい」

理人 「微妙なところ突いたよなあ」

寿明 「（頷いて）もう、受け入れたから」

理人 「ごめんごめん。けど三つサバ読んでたってことか」

カウンター上の寿明のスマホ。待受は笑顔の由美子。

理人 「付き合ってどんくらいだったけ？」

寿明 「半年、ちょっと」

理人の左手薬指には、指輪。

理人 「……あくまでアドバイスだけさ、今のうちに色々クリアにしとくつても手だぜ」

寿明 「え？」

理人 「そういう調査。後から何か出てくるよりマシだよ」

寿明 「いやいいよ。免許証だって見せてくれたし、この件は」

理人 「バレないようにやってもらえる」

寿明 「そういう問題じゃなくてさ」

理人 「俺はしたよ」

寿明 「え？」

理人 「借金あった。二百万」

寿明 「マジ？」

理人 「奨学金だったけどね。ちゃんと返してたし、嫁ちゃん
は借金って自覚も、隠してたつもりも無くてさ」
寿明 「ああ」
理人 「でも知つとした方がいいだろ？ 結構オススメ」
寿明 「……そんな騙し打ちみたいなこと、したくない」
理人 「言い方な。リファレンスチェックみたいなもんだろ」

3.

寿司屋・テーブル席（昼）

回らない高級寿司屋の四人掛けテーブルに、寿明と

由美子。向かいには寿明の母・北沢望（59）と父

・北沢毅（59）が座っている。

望 「この子ね、小さい頃ピアノ習ってたの」

寿明 「いいってその話は」

由美子 「え、そうだったの？」

寿明 「幼稚園とかの時、無理やり通わされてただけ」

望 「その先生と結婚するって言ってたんです」

由美子 「あら可愛いこと」

望 「だから、ああいうタイプの人連れてくると思ってた」

寿明 「母さん。失礼だろ」

由美子 「……どんな方だったか、後でこっそり教えてください」

二人、笑い合う。

望 「同い年って聞いてたけど、大人っぽい方で良かった」

由美子、笑顔で返す。

寿明 「……」

望 「この子、そっかしいところあるからさ、よろしくね」

由美子 「こちらこそ、ふつつかものですが」

望 「こないいい人いるなんてさ、街コンってすごいんだね」

毅 「由美子さんのご両親ともお会いしたいね」

由美子 「ええ、ぜひ」

毅 「ご実家はどちら」

由美子 「横浜の方です」

寿明 「そうだったけ」

望 「あらオシャレ。ウチなんか田舎だから」

由美子 「いえ。ぜひ今度お伺いさせてください」

寿明、横目で由美子をチラッと見る。

4.

帰り道（夜）

寿明 「ごめん、歳のこと言うの忘れてた」

由美子 「今は、言わないままでもいいよ」

寿明 「え？」

由美子 「今はね。気悪くさせても嫌だしさ。私のせいなんだけど」

寿明 「でもこのままってのも」

由美子 「ごめんね。その内、私の方から言う」

寿明 「分かった」

と、おもむろに立ち止まる。由美子、振り返って、

由美子 「なんかした？」

寿明 「由美子の実家ってさ、川崎だよね？」

由美子 「（あちゃーという顔で）あ、バレた？」

寿明 「なんでさっき、横浜って」

由美子 「おじいちゃん横浜の人だし、二駅行ったら横浜市だしさ」

と、うそぶく。

寿明 「は？」

由美子 「え、神奈川県民あるあるでしょ」

寿明 「何それ」

由美子 「知らないか。神奈川は大体みんな自称湘南か横浜生まれ」

寿明 「だったら最初からそう言えば良かったじゃん」

由美子 「……なんでそんな突っかってんの？」

寿明 「嘘付くようなとこじゃないだろ」

由美子 「嘘じゃないよ。横浜の、方だし」

寿明 「そうじゃなくて」

由美子 「え、なに？ 冗談じゃん」

寿明 「……」

由美子 「え、なんかごめん」

寿明 「……今日はちょっと自分ち帰るわ」

由美子 「え、明日休みでしょ？ 良いじゃん、ウチ来てよ」

5.

寿明のマンション・寝室（夜）

寿明、帰ってくるなり洋服を掛けてベッドに座る。

ふと、棚の写真立てが目に入る。
旅行先の寿明と由美子の写真。

6. 寿明のマンション・寝室（朝）

寿明、シングルベッドで眠るところに、携帯のバイブ音。寿明、寝ぼけ眼で通話に応じる。

寿明 「……何？ え？」

7. 寿明の実家・リビング（朝）

望、資料片手に電話していて、

望 「ごめんね、私も悪いとは思ってたんだけどさ。結婚するって聞いた時に一応頼んどいたの」

8. 寿明のマンション・寝室（朝）

望の声 「何も無かったら言わないでおくつもりだったんだけど、まず歳が違うしさ、ちょっと大丈夫かなと思って」

寿明 「……」

9. 寿明の実家・リビング（朝）

望、資料をめくって、

望 「やめろって言ってんじゃないの。でも知らないのは可哀想でしょ？ とにかく同じものさっき速達で送ったから」

10. 寿明のマンション・寝室（朝）

望の声 「とにかく見て頂戴。他にも色々書いてあるから」

寿明、電話を切り、携帯の電源を切る。

一つ息を吐いて、布団をかぶり、再び眠りに着く。

11. 寿明のマンション・寝室（夜）

インターホンの音。

寿明、目覚めて、急いでベッドを出る。

12. 寿明のマンション・リビング（夜）

寿明、インターホンのカメラを確認すると、配達員。

13. 寿明のマンション・玄関（夜）

寝ぼけ眼でドアを開けると配達員。

配達員「速達です」

寿明、サインを書いて封筒に入った荷物を受け取る。

配達員「あざっしたー」

差出人を見ると、望の名前。

配達員と入れ違いに、由美子登場。

寿明「何？」

由美子「全然既読にならないから」

寿明「ああ、ごめん。寝てた」

由美子「……何それ？」

寿明の手には、封筒。

14. 寿明のマンション・リビング（夜）

テーブルに腰掛ける二人。

由美子「昨日、怒ってたよね」

寿明「別にいいよ」

由美子「ううん。ごめん。ご両親騙すようなことしてさ、失礼だ

ったよね。二回もさ」

寿明「もういいって」

由美子「信用無くすよね。寿明くんもさ、こいつ、結婚ちらつか

せて必死だなんて思ったでしょ？」

寿明「思ってないよ」

由美子「お母さん、前から勘づいてたんだ。すごいや」

机の上には封筒。

寿明「ごめん」

由美子「見ないの？」

寿明「……」

由美子「見た方がいいと思うよ」

寿明「本当にごめん」

由美子「いいって」

寿明、封筒を手にとって、

寿明「俺にまだ言っただいこと、ある？」

由美子 「ない、と思う」

寿明 「奨学金、借りてたりする？」

由美子、意外なことを聞かれたという顔で、

由美子 「……うん。百万くらい残ってるかな」

寿明 も少し驚いて、

寿明 「そう、なんだ」

由美子 「なんで今聞いたの？」

寿明 「今は、それで十分」

と、封筒を丸めて、灰皿に乗せ、火にかける。

（おわり）